

大分市歴史資料館年報

(平成8年度)



1997

は し め に

平成8年度の年報をお届けします。

来年度は開館以来10年目を迎えており、現在10周年記念特別展の準備を進めております。ぜひご期待下さい。

施設・常設展示も10年たてば、どうしても徐々に色あせて感じられてきます。我々にとって有難いリピータの観覧者には、何時行っても代わり映えしないと言われることにもなります。それを防ぐためにテーマ展示や、特別展の開催、常設展示の一部展示替え等を随時行なって新味を出そうと、努力をしてまいりましたが、いまだ来館者に充分満足していただけるには至っておりません。しかし、職員一同常に新しい気持ちで運営にあたっておりますので、御理解頂きたいと思います。

来年度から次の15周年に向かって、資料館のリニューアルの計画を着実に実施して行きたいと考えております。これからも、市民の皆様方のご支援をお願いいたします。

1997年3月31日

館長 木村 幾多郎

目次

展 示	1
テーマ展示 特別展示	
講演記録	4
研究ノート	15
資料調査	19
教育普及活動	20
資料収集	22
図 書	26
資料館利用状況	32
管理及び運営	34
歴史資料館協議会 組織・職員	
決算 施設管理業務の内容	
施設の概要	36
条例・規則	38
日誌抄	44
利用案内	46

展 示

テーマ展示

本年度は以下のテーマ展示を開催した。



第1回「新収蔵品展」

会期 4月27日(土)～6月23日(日) 入館者数3,997人

当館がここ2、3年の間に収集した資料の中から、歴史的に貴重と思われるものや、内容的に興味深いものを選んで展示・紹介した。

展示資料

銅鐸（伝大分市木田名辺山谷出土）／トルセリーニ著『東洋の使徒フランシスコ・ザビエルの生涯』／花樹鳥文蒔絵螺鈿洋筆筒／賀来飛霞植物写生図／西洋古楽器（複製品）ほか

第2回「大分ゆかりの人物展」

会期 7月6日(土)～9月29日(日) 入館者数3,036人

郷土大分に関わりの深い、松平忠直(1595—1650)、後藤碩田(1805—1879)、滝廉太郎(1879—1906)の三人の人物について、遺品等の関連資料の展示を通して、その足跡や業績を紹介した。

展示資料

松平忠直画像（複製品、原本・浄土寺蔵）／伝忠直寄進「熊野権現縁起絵巻」／伝忠直所用の鏡、鎧、轡、（以上、津守熊野神社蔵）／後藤碩田画

像／豊後国図田帳考証草稿／豊後国図田帳写／銅鐸の拓本（以上、後藤進蔵）／滝廉太郎直筆楽譜（「花盛り」・「海邊納涼」）／廉太郎愛用の眼鏡／廉太郎の写真ほか

第3回「中根家所蔵諸国城絵図展」

会期 12月7日(土)～1月26日(日) 入館者数1,424人

大分市在住の中根家（本多忠勝に仕え、代々同家の家老職をつとめる）に伝わる100点をこえる貴重な城絵図の中から、その一部（約27点）を展示・紹介した。

展示資料

播州姫路絵図／三州岡崎城図／三州刈谷城図／下総古河城図／備中松山城図ほか

第4回「南蛮美術展」

会期 2月1日(土)～3月30日(日) 入館者数2,336人

当館が収蔵している南蛮文化・キリシタン関係資料の中の美術品、約20点を展示・紹介した。

展示資料

南蛮屏風（模写、原本・神戸市立博物館蔵）／南蛮漆器／南蛮人図鏡／南蛮つば／ティセラの「日本図」ほか

パソコン学習クイズ

本年度は、「大分の近現代クイズ」（全15問）を製作した。全体を「発展編」・「あゆみ編」「人物編」に分け、以下のような内容の設問を設けた。

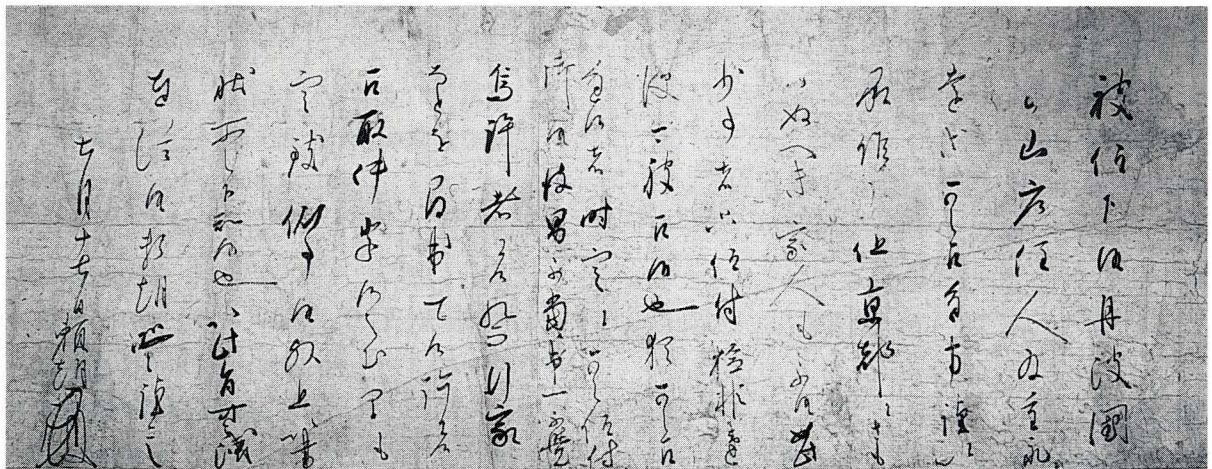
- ①「発展編」 明治初年の大分市域の人口／昭和38年の市町村合併／昭和39年の新産業都市指定／昭和53年の市新庁舎建設／大分市の姉妹都市・友好都市
- ②「あゆみ編」 路面電車（大分～別府間）／大分市の空襲／高崎山のサル／昭和41年の大分国体／社会教育施設の建設
- ③「人物編」 滝廉太郎／福田平八郎（画家）／生野祥雲斎（工芸家）／高山辰雄（画家）／村山富市

「毛利空桑記念館文書」中の伝源頼朝書状について

東京大学史料編纂所助手 本 郷 和 人

1997年3月、史料編纂所の山口隼正教授、山家浩樹助教授、それに私の三名は大分市歴史資料館を尋ね、文書資料の調査に従事した。その折同館の長田弘通氏は、私たちに1通の文書を示された。それが「毛利空桑記念館文書」のうちの、伝源頼朝書状であった。(以下、「空桑」頼朝書状という言い方をすることがある)

頼朝と聞いて目を輝かせた私たちは文書を撮影して所へ帰り、早速検討を開始した。頼朝文書の難しさは今更言うまでもあるまいが、それでも読解の努力を重ねるにつれ、漸くいくつかのことが明かになってきた。そこでこの場を借りて一応の報告を行い、大方の批判を俟つこととしたい。



被仰下候、丹波国

□山庄住人為重・永

遠等、可令召進事、謹以

承候了、但京都にさも

候ぬへき家人も不候候、如此

少事者、只仰付檢非違

使、可被召候也、猶可令召

進候者、時定に可令仰付

御候、彼男不当第一不覺

烏許者に候、然而行家

などを尋出て候許に候、

召取件輩候はむ間も

定致僻事候歟、且以書

状所令下知候也、以此旨可令洩

達給候、頼朝恐々謹言、

七月十七日

頼朝(花押)

1、文書の真偽について

まずは「空桑」頼朝書状の写真、それに釈文を見ていただこう。

文書は、下の余白部分が切られているほかは、作成時の形態をよく伝えている。言葉遣い、文章、紙質等々、中世初期のものとして相応しからざるは無いように見える。しかし、無論それだけでは客観的な証左にはなりえない。

そこで、「保阪潤治氏旧蔵文書」の中の、(年欠)四月七日元頼朝書状⁹⁾に着目してみたい。この文書は、頼朝文書研究の第一人者、史料編纂所の黒川高明教授によって、数少ない正文であることが認められている¹⁰⁾ものである。

いま「空桑」頼朝書状と保阪氏文書の頼朝書状を見比べてみると、両者の筆跡は実によく似ている。図1を見てほしい。ここでは「国」、「庄」、「重」、「承」を挙げたが、適当な例は他にも数多く存在する。とくに注目すべきは「候はむ」という語の書き方で、これだけ似ていれば、両書状の筆者は同一の人物と推断してよいだろう。

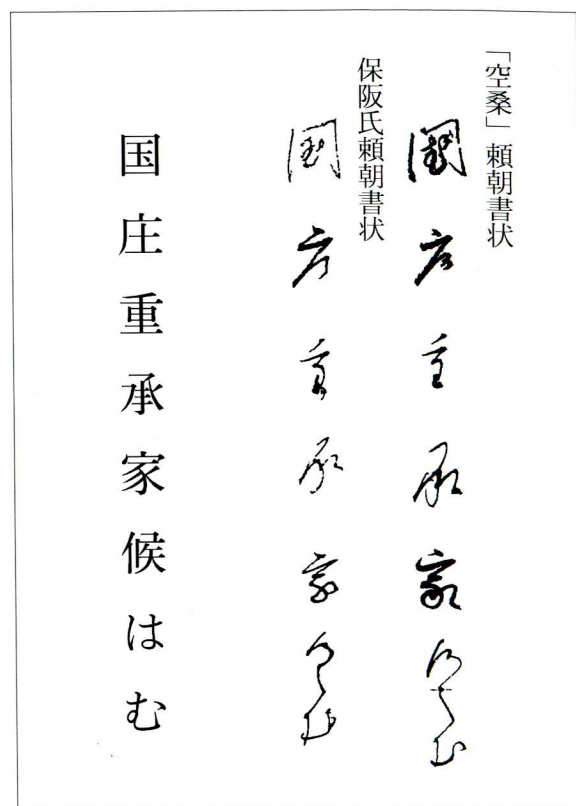


図 1

保阪氏文書の頼朝書状は、内容からして東大寺に伝えられたものであろう。一方、「空桑」頼朝書状は、豊後国の大友氏に伝えられた(後述)と考えられる。伝来を全く異にし、同一人によって書かれた二通の文書が存在する。ということは、両者ともに正文である可能性が極めて高いのではないか。

史料編纂所の林譲助教授のご教示によると、「島津家文書」の中の(年欠)七月十日元頼朝御教書¹¹⁾は奉者の「平」自身によって書かれたものであり、この「平」は頼朝右筆として著名な平盛時であるという。そしてこの文書の字体が、やはり「空桑」頼朝書状¹²⁾と一致する。本書状は(むろん保阪氏文書の書状も)頼朝の命を受けて、平盛時が作成した文書であると考えられる。

2、文書の伝来について

文書の伝来に触れたところで、甲斐素純氏の論考¹³⁾により、ここで本書状の伝来についてまとめておこう。

大名としての大友氏の歴史は、周知のごとく宗麟の子の吉統の代で終了する。大友の一流は松野氏を名乗り、肥後細川藩に仕えて幕末を迎えた。明治二十年、史料編纂所は松野直友氏が所有する文書を調査し、影写本「大友文書」(架蔵番号2371-1)を作成したが、まさにそのうちの一通が「空桑」頼朝書状であった¹⁴⁾。大友氏はかつて頼朝の子孫を称していたから、あるいはその頃に八方手を尽くし、頼朝の書状を入手したのではないか。そしてそれが松野氏に伝えられたのではないか。

やがて大友氏を祀る神社の建立が大分町で討議され、松野氏は熊本から大分へ、文書を持って移住した。ところが結局神社は造られず、松野氏の文書も四散した。あるものは西寒多神社に、あるものは常楽寺に所蔵された。このとき「空桑」頼朝書状を含む三通は、鶴崎在住の儒学者、毛利空桑家の有に帰すことになった。空桑の子孫はやがて文書を大分市に寄贈、現在の文書所有者は、大分市教育委員会である。

3、文書の内容について

それではいよいよ、文書を読んでみよう。『為重・永遠を捕縛せよ』とのことですが、いま京都には適当な家人がおりません。頼りない者ではありますが、時定に申し付けましょう。」頼朝はそう言い送っているらしい。

為重・永遠については調べがつかなかった。当時、北陸から京にかけて分布していた斎藤氏の一流に疋田氏があり、その疋田氏に永遠なる人物がいる。彼の血縁には為□を諱とする者が多くいるので、あるいはこれに該当するかもしれない。けれども為重と永遠の関係ですら明らかではないのだから、系図だけでは証拠になるまい。

時定はいうまでもなく北条時定である。文治の守護地頭設置問題で在京していた北条時政が鎌倉に帰ったあと、京都で活躍した人物である。彼は時政の甥(従弟とも)で本来の北条氏総領といわれ、北条氏が元来いかなる武士だったかを研究する素材として、近年しばしば言及されている¹⁵⁾。

文治二年(1186)五月十二日、時定は源行家・光家父子の居所をつきとめ、和泉国近木郷に行家一類を襲撃して誅殺した¹⁶⁾。大変な功績である。頼朝書状の「行家などを尋出て候許に候」の文言はこのことを指している。「ばかり」という語からすると、頼朝書状は文治二年に書かれたものと推測し得よう。

続いて同年六月、大和国宇多郡に向かった時定は源義経の婿であった源有綱の一族と一戦、有綱以下を討ち取り、残党を捕縛した¹⁷⁾。七月十八日、これらの功労の賞として左兵衛尉に任官¹⁸⁾。同時に検非違使にも任じられたと思われる¹⁹⁾。頼朝書状が書かれた次の日のことである。

「不当第一、不覚烏許の者」。書状中で、頼朝は時定を酷評しているようにみえる。任官と酷評といえば、文治元年四月、許可なく官職に就いた御家人たちへの、散々な罵倒²⁰⁾が想起される。義経の破滅も、一存での任官がこのの発端であった。時定も頼朝の怒りをかったのだら

うか？

ところが、どうもそうではないらしい。時定の任官は、七月始めに頼朝が強力に推挙した結果であった²¹⁾。書状中の評価も、すぐに「然而」と語調が一転しているのを見逃してはなるまい。「行家などを尋出て候許に候」と、誇らしげに時定を紹介する導入にすぎぬと解すべきである。

「こいつは駄目な奴で、きっと失敗もするでしょうが、私からもよく言いかせておきますから」。頼朝の時定への言及は、私にはむしろ暖かく感じられる。そしてこうした文章読解が正鵠を射ているとすれば、時定と時政の関係は如何、さらには頼朝と時政の関係は如何、と考察を進めて行くための貴重な材料になるであろう。

4、文書の形式

最後に「空桑」頼朝書状の文書形式について述べよう。この書状には一見して分かるように、宛所が記されていない。ただし頼朝の書状に限っていえば、宛所を欠く例はしばしば見ることができる。そこで『吾妻鏡』文治二年八月五日条所載の、同日付の書状(以下「吾妻鏡」書状と呼ぶ)と比べてみよう。

「空桑」書状と「吾妻鏡」書状とは、ほぼ同じ時期に作成されている。右筆は前者は平盛時と推定され、後者は「平五盛時染筆」とあるから、これも確実に盛時である。宛所はともに記されない。ただし後者は「就帥中納言奉書、被進御請文」とあり、吉田経房が奉じた後白河上皇院宣への返事であったことが分かる。つまり「吾妻鏡」書状の形式的な宛て先は申次の経房、実質的な宛て先は後白河上皇なのである。文書の書き止めに目を向けてみると、前者は「以此旨可令洩達給候」、後者は「以此旨便宜時可令洩達給候」である。

作成時期、右筆、宛所が書かれぬこと、書き止め。両書状は酷似している。ならば、記されなかった「空桑」書状の宛所も、「吾妻鏡」書状に等しいのではないか。形式的な宛て先は吉田経房であり、実質的な宛て先は後白河上皇な

のではないか。

屋上屋を架するが如き推論を重ねたが、「空桑」頼朝書状について今まで述べてきたことをまとめると次のようになる。「後白河上皇から丹波国□山庄の住人の逮捕を依頼された頼朝は、当時顕著な活躍を見せていた北条時定を責任者として推挙した。書状は平盛時が書き、吉田経房に付された。やがて書状は大友氏が所有するようになり、現代に伝えられた。」

「毛利空桑記念館文書」中の伝源頼朝書状は、ほぼ間違いなく正文であると考えられる。そして北条時定の動向をはじめとして、まことに多くのことを教えてくれる。かくも貴重な文書を守って来られた大分の関係者の皆様のご努力に深甚な感謝の意を表し、史料紹介の筆を置くこととする。

注

- (1) 最新の成果として、林譲氏「源頼朝の花押について」（東京大学史料編纂所研究紀要6号、1996年）が挙げられる。ここで林氏は花押の形状を軸に、画期的な頼朝文書の分析方法を示された。なお、頼朝文書の研究史についても、同論文が的確な整理を行っておられる。
- (2) 黒川高明氏『源頼朝文書の研究』（1988年、吉川弘文館。以下黒川氏御論著と呼ぶ）に第96号文書として収録されている。
- (3) 同 上
- (4) 黒川氏御論著の第70号文書。
- (5) この点についての詳細と考証は、現在林氏が御論稿を準備しておられる。
- (6) 甲斐素純氏「大友祖霊社建設計画と大友松野文書の行方」（大分県地方史第136号、1989年）
- (7) 黒川氏御論著に第380号文書として収録されている。
- (8) 代表的な論稿として、杉橋隆夫氏「北条時政の出身－北条時定・源頼朝との確執－」（立命館大学500号、1987年）を挙げる。
- (9) 『吾妻鏡』文治二年五月二十五日条。
- (10) 『吾妻鏡』文治二年六月二十八日条。
- (11) 『吾妻鏡』建久四年二月二十五日条に載る、時定の卒伝による。
- (12) 『吾妻鏡』文治二年九月二十五日条に「検非違使平六兵衛尉代官」という語句が見える。
- (13) 『吾妻鏡』文治元年四月十五日条。
- (14) 『吾妻鏡』文治二年七月一日条。

資料収集

資料収集委員会

1. 会議

第1回 平成8年8月28日(木)

場 所 大分市歴史資料館会議室

議 題 (1)購入予定資料の審議
(2)その他

第2回 平成9年3月6日(木)

場 所 大分市歴史資料館会議室

議 題 (1)購入予定資料の審議
(2)本年度の資料収集
(3)その他

2. 委員名簿

氏 名	役 職	分 野
賀 川 光 夫	別府大学名誉教授	日本考古学
加 藤 知 弘	大分県立芸術文化短期 大学教授	日本海外 交流史
豊 田 寛 三	大分大学教育学部教授	日本近世史
菊 竹 淳 一	九州大学文学部教授	日本美術史
段 上 達 雄	文化庁文化財保護部伝 統文化課 文化財調査 官	民俗学
阿 部 利 重	大分市助役	地方行政

寄 贈

(1)唐箕、アセリ棒、チギ 3点 仲道輝雄 氏
(2)ひょうたん秤、乳鉢、乳棒 3点 今川利代 氏
(3)縄ない機 1点 佐藤国広 氏
(4)葉簞笥2、往診箱、花嫁衣装6、鞍、鎧、男性用和服11、往来証文、地券15、所得金高届3、所得金決定通知書8、卒業証書4、郵便葉書41、絵葉書(包み入り)7、写真資料33、教科書35、書籍(和本も含む)15 174点 手島主一 氏

(5)荒篩、茶壺、壺、手箕、腕木、アンカ、こね鉢、天秤棒、米櫃 9点 橋本吉人 氏
(6)小麦土入れ機、なべしき(紙製) 2 3点 渡辺憲夫 氏
(7)石臼、田植づな2、めぐり棒 4点 吉川公則 氏
(8)かいこ飼育箱2、バラ、クワツミカゴ、マブシ、シリトミアミ、センベツアミ 7点 木上良一 氏
(9)刀1、短刀1、歴代天皇肖像画 3点 三浦正夫 氏

購 入

(1)野上文書 4通
①2月25日付、大友義鎮書状(野上左衛門大夫宛)
②5月20日付、大友義鎮書状(野上治部少輔宛)
③12月25日付、大友宗麟書状(野上治部入道宛)
④8月1日付、長寿丸(大友義統)書状(野上治部少輔宛)
大友宗麟(義鎮)、およびその子義統が野上氏に宛てた書状4通。宛名から当時「玖珠郡衆」のメンバーであった野上氏に関わる一連の史料とみられる。①は「桂姫」の筑後までの道中における郡内の宿の手配と、日田郡までの道案内を命じたもの。②は「箏」を贈られたことへの礼状。③は「八朔」の祝いに「太刀一腰」等を贈られたことへの返礼。④は歳暮に「鉢」を贈られたことへの礼の内容が書かれている。なかでも、①は義鎮(宗麟)の娘の名前が明記された史料として、③は義統の幼名「長寿丸」の名前で出された数少ない文書の一つとして、注目される。なお、「桂姫」については、大分市の常楽寺に伝わる大友系図(大友義統の次子正照を祖とする大友松野家に関わる系図といわれている)に、宗麟の五女としてその名がみえる。
(2)コリャード『日本文典』(1632年ローマ刊)(D.Collado著 Ars Grammaticae Iaponicae Linguae) 1冊
ドミニコ会宣教師コリャードがラテン語で書

いた日本語の文法書。日本語を品詞別に説き、特に動詞に重点を置いて説明を行った書として知られる。ロドリゲスの『日本文典』に拠りながら、1619～22年の日本滞在中の見聞や読書で得た知見を加えて著されたものといわれ、その中にはロドリゲスが触れていない事実の記述もあり、当該期の日本を知る上で欠かせない本の一つとされている。

(3)柞原八幡宮境内絵図(「豊後名勝柞原社ノ図並ニ沿革略記」) 1枚

縦25.5×横37.0cm

豊後一宮、柞原八幡宮の景観を描いた名所絵。加藤賢成・矢野又彦らによって明治23年に出版されており、図中に金額(「定価三銭」)を示す朱印があることから、当時市販を目的に作成されたものとみられる。なお、本絵の著作兼発行者の加藤賢成は、明治18年に『豊後全史』を著した人物として知られ、また絵を担当した矢野又彦は、豊後鶴崎出身の画家で、帆足杏雨・高橋由一に師事し、「大野川漁遊図」(大正12年作)、「維新前鶴崎全景図」の模写絵(昭和6年作)、などの作品を残している。

(4)『画典通考』巻之三 1冊

享保12(1727)年に大岡晋斎、楠守国らによって出版された諸国故事談集で、本巻には、柞原八幡宮の祭礼市「濱之市」のことが記載されている。また本文中には、柞原宮および周辺地域の景観を描いた挿画も載せられている。

(5)安岡呉服店の勉強双六 1枚

縦39.5×横54.5cm

大分市本町(現在の中央町商店街)にあった安岡呉服店が宣伝用に出したもので、店の様子、品物の種類、バーゲン品などが双六仕立てで紹介されている。図中に記された電話番号(465番/大正10年の『大分県案内』によれば、同9年7月末現在の大分市の電話加入件数は444件とある)から、大正10年代～昭和初年頃に発行されたものとみられる。

(7)シャッピー著『ローマ教皇グレゴリオ13世伝』(『教皇グレゴリオ13世の英雄的で栄光にみ

ちた偉業の要略及び聖なる生涯』/Compendio Delle Heroiche Et Gloriose,At-tioni,Et Santa Vita Di Papa Graeg XII) 1冊

天正遣欧少年の使節が、1585年(天正13年)3月13日、ローマのパチカン宮殿にて謁見を賜った時のローマ教皇、グレゴリオ13世の事績について書いた本。同教皇に関する基本的な資料といわれているもので、使節謁見の記事や、豊後府内のコレジオ、臼杵のノビショド、有馬・安土のセミナリオの図等を載せた本としても有名。なお本書は、1591年に出版したものを、訂正・増補して1596年ローマで再版されたもの。

(8)からくり茶運び人形(復元) 1体

縦36cm×横18cm

『機巧図彙』(細川頼直著、寛政8・1796年刊)をもとに、現在のからくり人形師、半屋春光(本名矢野光男)が忠実に復元した「茶運人形」。冠形ガンギ車・歯車・カムなどの時計技術を駆使した「茶運人形」は、江戸時代のからくり人形の最高傑作といわれており、本人形は、鯨のヒゲを使っていたゼンマイを除いて江戸期そのままの材質を以て精密に復元したもの。

(9)臼杵藩政史料 5冊

①文久3(1863)年の臼杵藩の役方、およびその各職にあった人物の名前を書き止めた「臼杵藩士階級録」、②本高・知行割・神事・諸国道程など、49項目にわたって臼杵藩の事を記した「続亀城宝鑑」(上下2巻)、③文政11年～天保10年の藩政記録を抜き書きしたもの、また④領内に語り伝えられている「異能風流者」について採録した「臼杵異能伝」(渡辺利春著、宝暦8・1758年筒井惟延序)をおさめる。なお④は、文化6(1809)年「広正興子譲」が増訂したものを、文久3年に莊田重応が写したもの。

(10)十時英司草稿 一括

『大分県旧藩領域図全』、『大分県町村沿革表』、『毛利空桑全集』などの著・編者で知られる十時英司氏の、県内史跡や文化財調査に関する草稿類。この中には大分県史蹟名勝天然記念物調

査の一環として行われた大野郡直入地域の調査概要報告や『大分県旧藩領域図全』の関係資料などがある。その他、本資料中には、十時氏が研究のために利用したと思われる、明治～大正期の大分をはじめとする九州各県の地形図、50点余もおさめられている。

(11)大友義統一字書出 1通

大友義統が主従の証として元重兵部丞(統資)へ宛て自らの一字「統」を与えた文書。宛所の元重氏は、豊前国宇佐郡元重名(現宇佐市四日市)を本貫とする在地領主で、大友宗麟の時代には、「宇佐郡三十六人衆」の一員として大友氏の支配下にあったことでも知られている。同家に関する史料は、『大分県史料』第8巻、同35巻に全54通の文書等がおさめられているが、本文書は、その中に見えない未見の史料である。差出や宛所の名前から、上記『県史料』8巻所収の「元重実文書」26号(包紙のみ)の本紙かとみられる。

(12)錦絵「豊後鶴崎戦争」(永島孟斎画) 3枚合 縦35.5×横71.5cm

豊後鶴崎(現大分市鶴崎)での西南戦争を描いた錦絵。大山巖少将率いる官軍と、村田新八の妻伊尾ら女性たちの扮する薩軍との激しい戦いの様子が描かれている。同地では、明治10年5月16日、鎌田推一を隊長とする薩軍が、駐留中の警視二個小隊を襲撃する事件が起きており、この事件を題材に描かれたものとみられる。

(13)錦絵「豊後大友刑部大輔氏時」 1枚

縦36.4×横24.2cm

幕末・明治期を代表する浮世絵師、歌川芳虎(生没年不詳)が、「大日本六十余将」シリーズの一つとして描いた、大友氏8代、氏時の像。像上には、彼にまつわる武勇伝や、大友氏の簡単な歴史を紹介した文面も記入されている。豊後大友氏を題材とした珍しい錦絵である。

(14)錦絵「大日本六十余州之内、豊後」(緒形の鼻祖、華の本) 1枚

縦35.5×横24.6cm

平安時代末の豊後の武士、緒方惟栄にまつわ

る姥嶽大明神の伝説(同神は惟栄の先祖といわれる)を描いたもの。幕末の歌川派を代表する浮世絵師国芳(1797—1861)と、その門人「芳登女」(国芳の次女「芳女」のことか、父国芳のコマ絵を多く描いたといわれる)によって描かれたもので、改印や落款から、弘化元年(1844)頃の作品とみられる。

(15)錦絵「日本地誌略図、佐賀関」 1枚

縦18×横24cm

豊後佐賀関の景観を描いた錦絵。豊後国や竹田・臼杵・佐伯・杵築・日出・別府・府内・鶴崎の諸都市についての簡単な記述をも載せる。「広重」の署名と、「明治九年」の届印から、明治時代に多数の「開化絵」を描いて人気を得たとされる三代広重(1842—1894)の作品とみられる。

(16)引札 4枚

①松本醤油店(大:縦36.7×横51.6cm/小:縦25.5×横37.5cm)

②太田呉服店(縦36.8×横50.2cm)

③山本萬小間物店(縦37.5×横51.5cm)

商品や店の広告として配られたチラシ4枚。豊前宇佐郡北馬城の松本勘治醤油店のもの2点、中津新博多町の太田良三郎呉服店のもの1点、また中津や田川郡後藤寺に萬小間物卸店を営んだ山本岩蔵店のもの1点をおさめる。

複製品製作

本年度は、正保城絵図「豊後府内城之絵図」(原本・国指定重要文化財、国立公文書館内閣文庫蔵)の模写製作を行った。



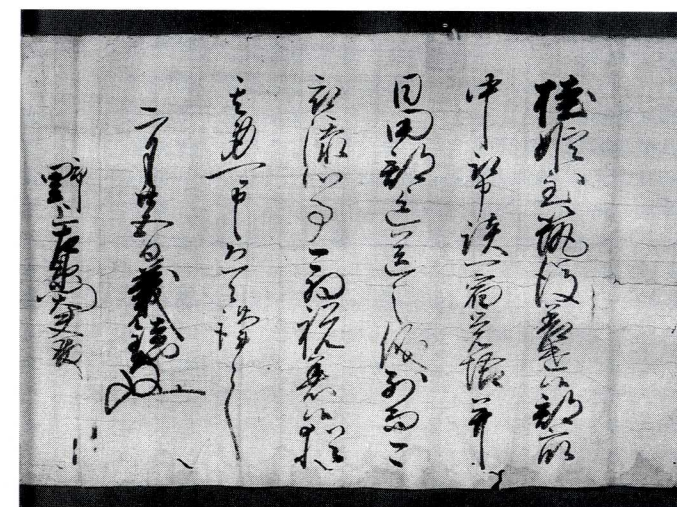
安岡呉服店の勉強双六



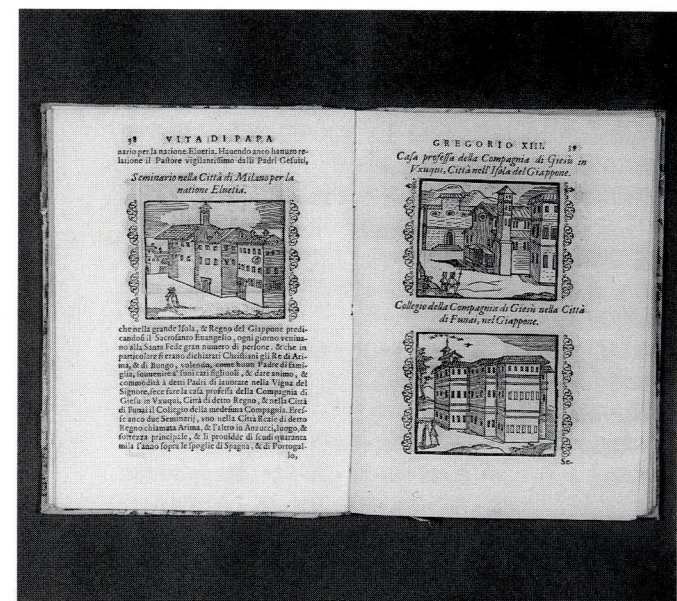
大日本六十余将 豊後大友刑部大輔氏時



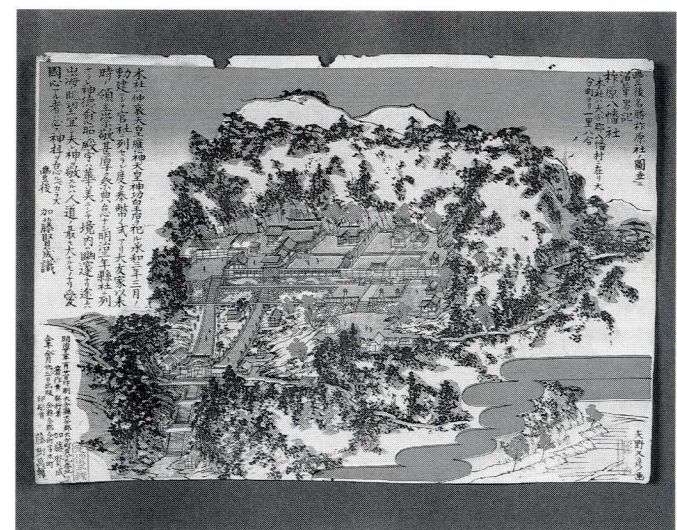
からくり茶運び人形(復元)



野上文書①



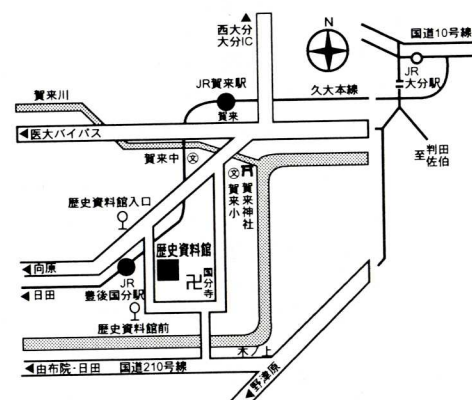
ジャッピ著『ローマ教皇グレゴリオ13世伝』



作原八幡宮境内絵図(「豊後名勝作原社図並ニ沿革略記」)

利 用 案 内

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
(入館は午後4:30まで)
- 休 館 日 月曜日(祝日にあたるときは翌日)
祝日の翌日
年末年始(12月28日～1月4日)
- 観 覧 料 大 人 200円(団体150円)
小中高生 100円(団体50円)
(市内の小学生は無料です)
- * 団体は30名以上
 - * 特別展の開催中は別料金になる場合があります。
- 交通機関 J R 久大線
○豊後国分駅下車
大分バス
○歴史資料館前下車
国分新町ゆき
向原ゆき(国分団地経由)
今畑ゆき()
中村ゆき()
竜原ゆき()



大分市歴史資料館年報

1997

発 行 日 平成9年10月31日

編集・発行 大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1

〒870 (0975)49-0880